

横浜歌人会 会報

123*

横浜歌人会会報 第123号

目次

●特集1 東郷雄二さんと歩く町空間——人とものが出会う町

- * 02 町歩きと短歌…東郷雄二
- * 06 徘徊する啄木…松村正直
- * 07 町歩き、飲み歩き…田村 元
- * 08 会津を歩く——^{ぬり}髯の辻まで——…齋藤芳生
- * 09 坂という〈体感〉…鯨井可菜子
- * 10 発見について…阿波野巧也
- * 11 街の経験…嵯峨直樹

●特集2 暮らす町角

- * 12 心ひとすぢ…森 藍火
空が広い町…三枝むつみ
- * 13 自然と歴史のふる里、三保町…荻谷君代
唐楓並木の町…平賀富美子
- * 14 鶴巻は坂の町…武田素晴
町の影…清水あかね
- * 15 鶴見川風物…松崎英司
私の暮らす町…渋谷香代子
- * 16 編集後記

町歩きと短歌

東郷雄二

●町歩きとは何だろっか

町歩きは楽しい。しかしよく考えてみると、町歩きと散歩はどがどうちがうのだろうか。「町歩き」という言葉は広辞苑にも日本国語大辞典にも載っていない。一部の人たちに慣用として使われている言葉だ。

私になるが、散歩と町歩きは町なかを歩くという行為自体は同じでも、その目的がちがう。散歩の目的は気分転換か体力維持といったところだろう。一方、町歩きの目的は知らないものに出会う発見にある。ここが単なる散歩と大きくちがう点なのだ。

一九八五年頃だったろうか。その頃、私はある仏和辞典の編纂に加わっていて、編集会議のためによく東京に出掛けていた。編集会議は土曜日に開かれる。会議が終わると、出版社の人たちと夕食をとって解散となる。出版社が目黒にマンションを持っていたので、よくそこに泊まらせてもらった。一夜明けると日曜日、京都に帰る他は特にすることもない。目黒のマンションを出て、急な権之助坂を上り、目黒通りを東に進む。首都高速二号线をくぐって間もなく、緑に包まれた屋敷のような場所に「日本画による初春展」という看板が掲げられていた。こんな所に美術館があったかなと思いつつも入ることにした。長いアプローチを進むと、木陰からクリーム色の建物が見えてくる。建物の入口にある乳白色の大きなガラスに翼を拡げ胸を反らした女神像が浮き彫りになっている。その美しさにうっとり眺めることしばし、ガラスの隅に目を

やると R. Lalique とサインがあるではないか。私は驚愕した。ルネ・ラリックといえは高名なフランスのガラス工芸家である。ラリックの作品が人知れずこんな所にあるとは。入場券を買って中に入り、凝った造りの室内装飾にまた驚いた。東京都庭園美術館として知られているその建物は、戦前に皇族の朝香宮邸として建設された日本でただひとつのアルデコの館だったのである。庭園美術館として発足したのが一九八三年の十月というから、私は開館間もない頃に偶然遭遇したことになる。それ以来この美術館が私がりわけ好む場所となったことは言うまでもない。

実は私の町歩きには教科書がある。赤瀬川原平、藤森照信、南伸坊編『路上観察学入門』（筑摩書房、一九八六年）である。赤瀬川原平は前衛芸術家で、尾辻克彦名義で芥川賞を受賞した作家でもある。後に『老人力』（筑摩書房、一九九八年）で「老人力」という言葉を流行させることになる。藤森照信は東京大学生産技術研究所助教授（当時）で専門は建築史。『建築探偵神出鬼没』（朝日新聞社、一九九〇年）など多くの本で建築探偵を名乗る。今では近江八幡にあるラ・コリーナなどの設計で有名な建築家でもある。南伸坊は多才なイラストレーターで文筆家。あるとき三人は意気投合して路上観察学会なる団体を立ち上げるのだが、その源流は早稲田大学の建築学教授であった今和次郎の考現学にあるという。この本にはマンホールの蓋のデザインをスケッチして集めている人や、解

体される建築の欠片を集めている人や、女子高校生の制服を観察している人などが登場する。極めつきは赤瀬川の超芸術トマソンだろう。トマソンとは、建物の二階が撤去され用済みなのに残されているどこにも行けない階段や、続きの建物がなくなったため用をなさなくなったドアなどのことで、赤瀬川はそこに「無用の美」を見出そうとした。トマソンとは、その昔、読売巨人軍に入団するもまったく打てなかった助っ人外国人選手の名に由来する。詳しくは赤瀬川原平『超芸術トマソン』（ちくま文庫、一九八七年）に譲る。

いつのことだったか、東京の京橋を歩いていると、偶然 INX ギャラリー（後に INXII ギャラリーと改称、現在は廃館）で開催中の一木努の「建築の忘れがたみ」展に出くわした。一木は『路上観察学入門』で紹介されていた解体される建物の欠片を収集している人である。偶然に感謝しつつ入場し、展示されている建物の欠片を心ゆくまで鑑賞したのは言うまでもない。ここにもまた町歩きのおかげの発見があった。

●町歩きと都市の風景

町歩きをするとき、どのようなものに目を留めるかは人によってちがうだろう。行き交う人を眺める人もいれば、公園や民家の庭の花を愛でる人もいるだろう。私は特に建物と地形に注意を引かれる。建築はもともと好きで、とりわけ明治・大正期の洋館や擬洋風建築を見るのが好きだ。東京には池之端の旧岩崎邸や、駒場公園の旧前田侯爵邸、若松河田にある旧小笠原伯爵邸など洋館建築がたくさん残っている。しかし今回は建築ではなく地形の話をしたい。

地形にもいろいろあるが、私が特に好きなのは坂と路地と階段である。NHKのテレビ番組「ブラタモリ」や、『タモリの TOKYO 坂道美学入門』（講談社、

二〇〇四年)でよく知られているように、タレントのタモリは日本坂道学会副会長を僭称するほどの坂道愛好者である。また最近、皆川典久『東京スリパチ地形散歩』(洋泉社、二〇一二年)、『東京23区凸凹地図』(昭文社、二〇二〇年)といった本も次々に刊行されて、ちよつとした地形ブームの観もある。

ただ私が住んでいる京都は地形愛好家には不向きな土地である。なだらかな京都盆地には、市内に吉田山、船岡山、双ヶ丘という平安京造営時にランドマークとなった低い岡はあるものの、それを除けば平らな土地で起伏が乏しい。東山には清水寺に続く清水坂や産寧坂があるが、いつも観光客で一杯で散策には向かない。

これにたいして横浜や神戸や長崎のような港町は坂が多く、それが独特の町の風情を醸し出している。港町に坂が多いのは、大型船が接岸するためには水深が深くなくてはならず、海岸近くまで山が迫っている地形が適しているからである。平地が狭いために、山が造成されて宅地になり、住宅がどんどん山を上っていくので坂が多くなる道理だ。中には長崎のオランダ坂のように観光名所になって歌謡曲に歌われる坂もある。神戸のハンター坂なども名高い。坂には名前が付いているものが多いが、それは正式な名称ではなく地元の人が付けた俗称である。京都の東山七条に「女坂」という坂があるが、それは坂を上った所に京都女子中学・高校・大学があつて、毎朝大勢の女子生徒・女子学生がこの坂を上ることに由来する。

海外の港町では特にポルトガルのリスボンが記憶に残る。大航海時代の出発点となったこの町は、七つの岡の上に築かれたと言われているほど坂が多い。市内には黄色いレトロな路面電車が走っていて、まるでケーブルカーのように坂を上る様子に驚かされる。また旧市街のアルファマ地区はうねうねと狭い道が続い

ておりまるで迷宮のようだ。アルファマの「アル」はアルコール、アルハンブラの「アル」と同じくアラビア語の定冠詞で、その昔、この土地を支配していたムーア人が築いた市街ということだ。庶民が暮らす地区なので、道端で七輪でイワシを焼いたりする。

都市の景観を形作る上で、公園などの緑地や河川沼沢は大きな役割を果たす。緑地は日陰を作り市民の憩いの場になるし、町を流れる川の河川敷や土手は散歩やジョギングに好適な場所である。しかし町の表情を作る上で坂が担っている役割も大きい。

東京はそのことがよく感じられる町である。東京は北西から広がる武蔵野台地が浸食されてできた土地であり、北西から南東に向かって五本の指を伸ばした手のひらのような形をしている。指の部分が尾根筋で、指と指の間が谷筋である。そこに高低差が生じ、尾根筋と谷筋をつなぐ坂が生まれる。

東京の高低差は驚くばかりで、それを実感するのは地下鉄に乗っている時だ。丸ノ内線で淡路町から御茶ノ水に差し掛かると、神田川を越える時に地上に出る。御茶ノ水から本郷三丁目を通って後楽園の駅に着くときにも地下から地上に出る。いずれも谷筋に差し掛かって土地が低くなったからである。極めつきは銀座線に乗って渋谷に到着する時だろう。ひと駅手前の表参道までは地下なのに、渋谷に着く直前に地上に出て、ホームは駅ビルの三階にある。渋谷駅は渋谷川が浸食した深い谷底に位置しているのである。

私の東京の定宿は本郷の東大正門に近い所にある。東大が建てられたのは本郷台地の上で、本郷通りは尾根筋のいちばん高い所を通っている。だから右へ曲がっても左に曲がっても下り坂になる。この辺りには、菊坂、鏡坂、本妙寺坂、無縁坂など風情のある名を持つ坂が多く、独特な町の景観を形成している。

江戸の昔から高低差は身分の差であり貧富の差であった。幕府は武士が住む武家地と町人が暮らす町人地を区別していた。開けていて日当たりの良い尾根筋は武家地で大名屋敷が建てられた。現在の東京大学の敷地の赤門のあるあたりは加賀百万石の前田家の屋敷跡である。一方、町人地は日当たりと水はけの悪い谷筋に多く、小商いで暮らす町人や職人が住んでいた。時代劇で描かれる長屋の道がよくぬかるんでいるのはこのためである。菊坂を下った所にある樋口一葉の旧宅跡を見れば当時の様子を偲ぶことができる。坂を上ることは社会階級を上昇することであり、富と権力を手にすることである。一方、坂を下ることは階級を滑り落ちることであり、貧窮と同義である。坂の上を見つめる眼差しには憧れと同時に諦めもあっただろう。

●坂の象徴的意味

坂は文学作品や映画などにもよく登場する。石坂洋次郎の『陽のあたる坂道』、江戸川乱歩の『D坂の殺人事件』、スタジオリブリの『コクリコ坂から』、コミックの『坂道のアポロン』、さだまさしの『無縁坂』などではタイトルになっているし、ゆずのヒット曲『夏色』で主人公は長い長い下り坂を自転車でする。坂には何か人を引きつけるものがあるようだ。

私は三省堂の『現代短歌大事典』も『岩波現代短歌辞典』も日頃からよく使っているが、編集方針がちがついておもしろい。『現代短歌大事典』は歌人をよく拾っているが、『岩波現代短歌辞典』では事物が多く立項されている。例えば「橋」は大項目で見開き二頁を占めていて、執筆は高橋睦郎である。その中で高橋は、橋は具体的には川や谷のあちら側とこちら側を結ぶもので、抽象的にはこの世界と異界とを結ぶものであると論じている。事物は詩歌においてしばしば

象徴的意味を帯びる。俳句や短歌は、背後に象徴的意味を引き連れた語彙を好んで用いることで、言葉の経済効率を高め、含意や暗喩や行間の意味を作り出す。これが制度化されたものが俳句の季語だろう。和歌では歌枕がそれに当たる。

『岩波現代短歌辞典』には「坂」も立項されていて、坂を上ることに理想実現の過程やあるべき現実への希望というプラスのイメージが、坂を下ることには理想からの後退、失意と挫折というマイナスのイメージが付着しているとある。例歌として引かれているのは次の佐佐木幸綱の歌である。

山王坂を共に上りし日を語る梨の木坂を下りたる
日も 佐佐木幸綱

この歌では、山王坂は壮志を抱いた青年時に上り、梨の木坂は老境を迎えて下る坂として描かれている。梨の木坂は国会図書館の横に、山王坂は衆議院第一議員会館と第二議員会館の間にあり、山王日枝神社に続く道である。地図で見ると、ごく近くにある二本の坂であることに改めて気づく。若い頃と老年に差し掛かった現在とで、心のあり処は変化してはいないことを示しているのかもしれない。

上り坂が青春と上昇のイメージを持つことを示すのなら、国語の教科書にも載っている次の歌の方がふさわしかろう。

のぼり坂のペダル踏みつつ子は叫ぶ「まっす
ぐ?」、そうだ、どんだんのぼれ 佐佐木幸綱

次に挙げる歌では坂の上に童謡教室がある。坂の上は山の手で、裕福な人たちが暮らす場所である。自宅

で童謡教室を開いているのはそんな未亡人だろうか。立ち漕ぎで坂を上る〈私〉の心の中にはそんな暮らしへの憧れがあるにちがいない。

坂の上の童謡教室ジグザグに自転車漕ぎゆく腰を
浮かせて 石井絹枝

その一方、次の桑原の歌では坂の上は理想や憧れのある場所ではない。しかし病む老妻を車椅子に乗せて押す作中の〈私〉にとっては、ただひとつ希望の残された場所である。

坂の上に湧く白き雲 いまはただその雲めざし車
椅子押す 桑原正紀

上り坂とは反対に、歌に描かれた下り坂には失意と敗北のイメージが色濃く漂う。

昭和四十年以来わが身は長き坂まろび来し如くま
ろびゆく如し 佐藤佐太郎

昭和二十三年十八歳心朽ちき神田駿河台一口坂
石田比呂志

佐藤の歌の坂は特定の坂ではなく喩として置かれている。まさに「坂を転がり落ちるごとく」である。石田の歌に登場する一口坂は靖国神社の近くにある。そう詠まれてはいないが、作中の〈私〉はこの時坂を下っていただろう。

坂が帯びる象徴的意味はこれに留まるものではない。梅内美華子の『現代歌枕』（NHK出版、二〇一三年）には、坂が境界でもあることが書かれており、その例として『古事記』の黄泉比良坂が挙げられている。

黄泉比良坂は生者の暮らすこの世と死者のいる黄泉とをつなぐ坂である。梅内は次の歌を引いている。

陽が落つる奈良油坂不可思議な楽をまどひて迦楼
羅は来たる 永井陽子
うらぶれて九段の坂をくだりゆく亡者の群れか聲
なくすぎむ 一ノ関忠人

永井の歌の迦楼羅は鳥の姿で描かれることもある仏教の守護神で、当然ながらこの世のものではない。油坂（油阪）は近鉄奈良駅から東に続く坂で、交通量の多い道である。こんな場所に異形のものが出現するのかと少し驚く。一ノ関の歌に登場する九段坂は靖国神社に続く道である。したがって坂を下る人たちは参拝を終えた戦没者の遺族と考えるのが妥当だが、それはいまだに大陸の草原や南洋の海底に屍を残す死者の姿と重なる。いずれの歌でも坂は現世と異界を接続する通路として描かれている。言うまでもなく、そのような通路に近づくのは危険なことであり、戦慄を覚える経験なのである。

このような坂の持つシンボリズムは、そもそも坂が上にある高い場所と下にある低い場所を結ぶ機能を持つところから来るのだろう。「結ぶ」ということは、本来は異なるもの、左右に分かれているものを接続することをいう。このために坂は、橋や鳥居など境界を表すものと同じように、私たちが暮らしているこの世界と、それとは異なる世界、つまり死後の世界や現世を超えた神秘的世界の境界と見なされるのだろう。

●短歌に詠まれた坂

今回は『岩波現代短歌辞典』の初句索引と、『角川現代短歌集成』の語句索引を活用して、「坂」が詠み

込まれた短歌を探してみた。坂の歌は『角川現代短歌集成』第一巻「生活詠」の中の「都市・街・町」の一角に集められているが、それ以外の場所にも散在していて、存外数が多い。

先に述べた異界との境界というシンボリズムの作用で、坂は幻想的・神秘的な出来事が起きる場として描かれることがよくあるようだ。

坂くだる少女の爪のはらはらと散るくれなゐを聴
きつつゆくも 水原紫苑

坂道をゆつくりゆらゆら下りてゆく紋白蝶を二つ
引き連れて 小寺三喜子

漂ふは神のみならずひらひらとまひるましろき坂
くだりたり 高嶋健一

春かぜに乗って無人の乳母車嘘つき坂を登りて消
えつ 石田比呂志

乳母車突き放す手は見えねども坂の真上に夕陽の
ありつ 宮原望子

水原はもともと幻想的な歌風の歌人だが、この歌でも坂を下る少女の爪が剥がれ落ちるといふあり得ない光景が美しく詠まれていて、高嶋の歌では名指されてはいないものの坂道をひらひらと下っているのは紛れもなく蝶である。前者では蝶を引き連れた〈私〉に超常的なオーラがあり、後者では蝶そのものが異界からの使者のようだ。また石田の歌では無人の乳母車が坂を上るといふあり得ない光景が詠まれている。「嘘つき坂」は創作で、この歌も実は嘘なんだよという仕掛けだろうか。作者の「アカンベー」が見えるようだ。宮原の歌は、乳母車が姿の見えない人物によって押し出され、今にも坂を転がり落ちる瞬間のようで、これも

恐ろしい。この歌に描かれているのは純粋な悪意である。

次に挙げる歌で坂は歌人の人生の機微や境遇を映してさまざまな陰翳を帯びて描かれている。

夜の坂を電車くだりぬ生の炎の哀しみながく揺る
る思ひぞ 筑波杏明

目白坂地獄胸坂さび朱なすきみの子守りてのぼり
くだりき 山田あき

犬はここに今死にゆかん遠き坂の傾斜がふしぎに
美しくして 真鍋美恵子

忽然としてひぐらしの絶えしかば少年の日の坂の
くらやみ 佐藤通雅

一首目の作者の筑波杏明は、「まひる野」所属の歌人で、警視庁機動隊の隊長であった。歌集『海と手錠』には、「われは一人の死の意味にながく苦しむ六月十五日の警官として」という樺美智子の死を悼む歌が収録されている。筑波は貧しい農村に生まれ、民衆の側に所属する自分と警官官という職務の矛盾に苦しんでいた。電車がゆつくり下る夜の坂はそのような筑波の生の哀しみを象徴しているかのようだ。

二首目の山田あきの夫は坪野哲久で、二人はプロレタリア短歌と左翼運動に打ち込んだことで知られる。検査もされていて、当然ながら生活は苦しかった。この歌で坂は生活の困難の象徴として描かれている。目白坂は文京区関口にあり、目白台を上る坂で突き当たりに明治の元勲山縣有朋旧宅の椿山荘がある。一方、地獄胸坂は実在しない。しかし椿山荘と東側にあり、新江戸川公園（肥後細川庭園）の間に胸突坂という急坂がある。すぐ近くに関口芭蕉庵があり、松尾芭蕉が神田上水の改修工事に携わっていた頃住んだ場所と

言われている。

三首目の真鍋の歌は愛犬が死を迎えた時の歌だろう。遠い坂は実在の坂ではなく、これからあの世へと旅立つ愛犬が辿る坂かもしれない。

四首目の佐藤の歌に描かれるヒグラシは、朝と夕方に鳴く蟬である。ヒグラシが忽然と鳴き止んだのだからおそらく夕方だろう。外で遊んでいたらおもいのほか早く日が暮れてしまった。夕闇に襲われた佐藤少年は心細くなった。その目に坂は恐ろしいものが隠れている場所と映ったのかもしれない。

友待つと思ひてくだり妻待つと思ひてのぼるわが
柿生坂 岩田 正

その後の道玄坂をくだりゆく左の路次は罪のごと
くにて 二宮冬鳥

吾とともに移ろふごとき星屑を仰ぎ登りぬ往診の
坂 林 宏匡

柿生坂は岩田の歌集の題名にもなっているが、妻との静かな暮らしを象徴するかのようだ。一方、二宮の歌には何やらほの暗いムードが漂う。渋谷の道玄坂を上ったところにある円山町にはその昔花街があり、今はその名残としてラブホテルが建ち並ぶ。道玄坂を下る男には心にもやましいことがあるのだろう。三首目の林は北海道の根室で暮らした医師である。冬空に輝く星辰は、病者のもとへ往診に向かう自分を励ますために付き従うかのごとくである。医師はそれに力を得て凍てついた北国の坂を上る。

坂は街に起伏と陰影と独特の風情を生み出すが、短歌に詠まれた坂もまた、作者の人生と境涯を暗示するアイテムとしてさまざまに詠まれている。それを巡るのは短歌の中の町歩きと言えるかもしれない。

徘徊する啄木

松村正直

私も五十歳を過ぎて、のんびりと町歩きを楽しむことが多くなった。旅先の知らない町を歩いたりすると、思いがけない出会いや発見があつて面白い。自分の心にもゆとりがあるからだろう。

十代や二十代の頃はそうではなかった。もつとあてどない感じや切羽詰まった気持ちで町を歩いていた。就職せずに各地を移り住んでいた二十代の頃は、夕方にアルバイトが終つてもアパートには帰らず、町をさまよい歩いた。一人の部屋に帰つても何も無いからである。カフェや公園を転々として、通りを眺めたり、本を読んだり、ノートを書いたりして、夜遅くに帰宅する。部屋はほとんど寝るだけの場所であつた。

二十六歳で短歌に出会つたのだが、初めて新聞歌壇に載つた作品は「寂しさの分だけ夜を遠回り歩き疲れて下宿に帰る」というものだった。まさに、当時の私の生活そのままである。

石川啄木の日記を読むと、一九〇八（明治四一）年に二十二歳で最後の上京をしてからは、よく町を徘徊していたことがわかる。二十六歳で亡くなるまで啄木は、あてどない気分で町を歩き回っている。

その話題に入る前に、横浜歌人会の会報であるから、啄木が横浜に来た時のことを書いておこう。啄木の最後の上京は鉄道ではなく、函館から船で横浜に渡つたのであつた。四月二十七日、横浜に着いた時の様子を次のように日記に書き残している。

「軍港横須賀の沖合には、新しく築かれた砲台が二

つ三つ、海の中に牛の如く臥て居た。港の入口と覺しきあたりに、軍艦らしい櫓が七八本。馳（やぶ）て、横浜の崎が見えだした。／船は防波堤の奥深く入つて、午後六時鐘を投じた。人々と共に二昼夜半の航海を終つて上陸、正金銀行前の長野屋に投宿。船の中で枕を並べた二人と室を同じうする。」

啄木の泊まつた長野屋は、今の横浜平和プラザホテルの場所にあつたらしい。翌日、啄木は向かいの横浜正金銀行を訪れ、新詩社のメンバーでこの銀行に勤める小島烏水と会つて昼食を共にしている。

一九〇四年竣工のこの建物は、現在も神奈川県立歴史博物館として残っており、重要文化財に指定されている。小島は登山家・紀行文作家で、『日本山水論』などの著書がある。小島と文学について語つたあと、午後二時の汽車で啄木は東京へ向かつた。

東京で小説を書く生活を始めたものの原稿はまったく売れず、鬱々とした日々が続く。そんな中で啄木は、東京の街を徘徊するようになる。ただの散歩ではない。それは、「好き歩き」というものであつた。

六月十九日の日記を見てみよう。吉井勇が下宿を訪ねてきた後の記述である。

「八時頃、二人で出かけて大学の前の夜店を見てあるく。手踊人形といふものを二人で買った。その時、僕ら二人と外に二人の女が立つてゐた。一人は美しい人であつた。僕は、これをしもすき歩きと云ふのだと云ひながら、其あとをつけてあるいた。人込の中に隠れつ現れつする白地の単衣の人！」

「好き歩き」は古くは源氏物語にも使われている言葉で、「色事を求めて歩き回る」という意味らしい。七月八日の日記にも出てくる。

「日のくれるのを待つて金田一君と共に好き歩き。金田一君はすぐ帰つたが、予は九時過まで歩いた。今夜

から大学の前に植木やが沢山出てゐる。一種の風情だ。／一昨夜の女——小供の手をひいた白衣の女にまた逢つた。恋を狩る女だと思ふとをかしくなる。」

こんなふうには、啄木は目的もなく夜の町をさまよい歩き、若い女性を見つけて後をつけたりしている。かなりアブナイ人と言つていいだろう。一方で、同じ時期に何度も自殺願望を日記に書きつけ、実際に電車に飛び込みそうになったりもしている。

文学の面で言えば、このように町を徘徊する姿は、啄木の散文詩「二人連」にも描かれているし、また短歌にも詠まれている。

あたらしき心もとめて／名も知らぬ／街など今日もさまよひて来ぬ 『一握の砂』

気弱なる斥候のごとく／おそれつつ／深夜の街を

一人散歩す

気がつけば／しつとりと夜霧下りて居り／ながく

も街をさまよへるかな

曠野より帰るごとくに／帰り来ぬ／東京の夜をひ

とりあゆみて

いつまでも歩いてゐねばならぬとき／思ひ湧き

来ぬ、／深夜の町町。 『悲しき玩具』

人生に対する不安や怯え、やり場のない鬱屈などを抱えて、ひたすら街を歩き回っていたのだろうか。

こうした感覚や行動は、生まれ育つた土地で一生を終えることの多かつた近世までにはなかつたものである。近代の都市生活によつて初めて生み出されたものと言つていい。

街を歩きながら、人はものを考え、自らを見つめ直したりする。おそらくそうした時間が、啄木の文学にも大きな実りをもたらしたのではないだろうか。

町歩き、飲み歩き

田村元

群馬県の山あいの村で生まれ育ったので、いまだに町というものにあこがれがある。実家から小学校までは片道四キロあって、歩いて一時間かかった。学校が終わったあと、同級生と一緒に帰ってくると、いちばん家が近い同級生と別れたあと、さらに一・五キロくらい一人で歩かないといけなかった。街灯が三百メートルおきくらいにしかない山道は、冬になると真つ暗で、寒くて、怖かった。

通学路には酒屋のような小さな雑貨屋が三軒あるのみで、駄菓子屋もコンビニもなく、最寄りの書店があったのは隣り町だった。だから、桐生市の高校に通うようになるまでは、親が買い物のついでに買ってきてくれる「ジャンプ」とか「コロコロコミック」などの漫画雑誌以外の本は、ほとんど読んだことがなかったのだ。

大学入学と同時に村を出て、札幌に四年間住んだ。家から徒歩五分のところに地下鉄の駅があり、徒歩圏内に学生向けの飲食店が何軒もあった。町の書店には本がずらりと並んでいたし、ススキノのネオンは色とりどりに輝いていた。都会育ちの同級生の話を聞いていると、十年か二十年くらい未来から来た人と話しているような気持ちになったものだ。

会社勤めを始めてからは、大阪府富田林市、東京都品川区、千葉県松戸市、神奈川県横須賀市を経て、今は横浜市に住んでいる。すっかり都市生活者の一人になり、仕事帰りや休日の夜には、繁華街の赤提灯で一

杯ひっかけた帰るとい生活スタイルが身についた。歌人ゆかりの居酒屋や飲食店を訪ね歩いて、『歌人の行きつけ』（いりの舎）というエッセイ集も出版している。酒場に通うようになったのは、お酒が好きというのほもちろんあるが、都会の生活へのあこがれというものが根っこにあるように思う。もし群馬の実家に住んでいたとしたら、車を運転しないと生活できなかったはずで、仕事帰りに飲みに行くのも、簡単なことではなかっただろう。

東郷雄二さんがエッセイの中で書かれている（町歩き）は、私も大好きだ。特に、初めて訪れる町の繁華街を歩くのがたまらない。私は旅行に行った先でも、いわゆる観光地のようなところにはほとんど足を踏み入れず、商店街をぶらぶら歩いて、スーパーでその土地ならではの食材が売られているのを眺めたりして過ごしている。（スーパーのいいところは、お土産が安く手に入ることだ。例えば沖縄のスーパーでは、ちんすこうやサーターアンダギーが空港の土産店の半額くらいで売られている。）疲れたら喫茶店で一休みして本を読み、もしこの町で育っていたら、どんな暮らしをしていたらどうかと想像する。日が暮れたら横丁に吸い寄せられて、今宵の酒場を物色。何軒かはしご酒をしいたらその日の町歩きは終了である。

東郷さんにならって私も町歩きの教科書を紹介すると、川本三郎『私もまた渚を枕 東京近郊ひとり旅』（ちくま文庫）には特に影響を受けている。横須賀、大宮、船橋といった東京近郊の町を訪れ、町歩きをしたあとに酒を飲んで、ビジネスホテルに一泊するという旅が記されたエッセイ集だ。この本の影響を受けて、私も宇都宮、秩父、静岡、新潟などに一泊の旅に出かけた。例えば、宇都宮の商店街は、近年、空き店舗に飲み屋がたくさん入り、飲み歩きに最高の町になって

いる。秩父の居酒屋のお通しは、なんと握り寿司だった。静岡の青葉横丁のおでん屋は、おでんだけでなくアジフライや焼きトンも絶品。新潟のセブンイレブンのおにぎりは、関東のものとは比べ物にならないくらいお米がおいしかった。こんな風に、人々が暮らしている何でもない町を訪れて、食べたり飲んだりするの

が、私にとっては一番のエンターテインメントだ。最近の歌集を読んで、歩いてみたくなった町をいくつか紹介したい。

本郷の真砂の坂を上りゆくビルの狭間に今宵の酒場
東郷さんのエッセイにも出てくる本郷の坂が舞台だ。「真砂の坂」は、おそらく下町から山の手の本郷へ上っていく坂なのだろう。一般的には、酒場は都市の中でも低地にあることが多いが、この歌の酒場は坂の上か、坂の途中にあるようだ。ちよつと高級な雰囲気、いい酒と肴が味わる店なのではないだろうか。

神谷パーの電気ブランは須臾にして体をめぐる春の浅草
持田鋼一郎『愛河波浪哀歌』

台東区浅草一——に立地する神谷パーの名物、電気ブランが詠まれている。度数の強い酒だから、飲むとあつという間に酔いが回る。酔った身体のほてりと、「春の浅草」の空気がうまく調和している歌だ。私のような群馬県東部の出身者は、東京に出てくる時に浅草が終点の東武の特急を利用することが多い。だから、浅草は東京の玄関口のようなイメージがあつて親しみがある。何度も飲みに行っている町だが、今度は泊まりがけでゆっくり飲み歩いてみたいものだ。

齋藤芳生

歌ができないとき、文章が書けないときには、好きな音楽を聴きながら一〜二時間をひたすら歩く。福島県の福島市に住んでいるので、普段は家の近くを流れている阿武隈川沿いを。あるいは、市街地の古い路地を。メモは取らない。写真も撮らない。音楽のリズムに合わせてるようにして、ただただ、歩く。それが私の「町歩き」である。

「町歩き」をしていると、仕事の行き帰りならば慌ただしく通り過ぎてしまう道の途上にも、思いがけないものがあるかと現れる。現れる、というよりも、私の五感に勝手に飛びこんでくる、と言った方が正確かもしれない。ここ最近では、古い家の庭に昔からある花梨の木がたくさん実をつけているのを見つけた。気づいたのはそれまであまりかいたことなかったいいにおいがしたからだ。ああ、花梨の実ってこんなにいいにおいがするんだな。そう思って見上げると、重そうに実をぶら下げた枝の向こうから四十雀の囀りが高く響いてくる。いい声だ。もつとよく聴きたくて、流していた音楽を止め、ワイヤレスイヤホンを外す。つい数日前まで暑かったのに、風がひんやりしてきた。見上げている梢の向こうに、雲が光っている——。こんなささやかな一つひとつに喜んだり驚いたりしながら歩いていると、歌ができない、文章が書けない、ときりきりしていたところやすこしやわらかくなるような気がする。「町歩き」の効能は、歌や文章の素材を集めるというよりも、こうして頭やこころをやわ

らかくすることにあるのだろう。

もちろん旅先でも、「町歩き」は愉しい。

雨女われ完敗の猛暑日を歩みゆくなり髹の辻まで

『花の渦』

「髹」とは工芸に使われる漆のこと。「髹の辻」は古くから会津漆器の職人達が多く集まって仕事をしてきたという一角で、現在は江戸時代から続く漆器店によって当時の建物を改装した伝承館が運営されている。この日はとても暑く、汗を拭きながら、日陰を探しながらの「町歩き」だったのだが、かねてより訪ねたいと思っていたこの「髹の辻」まで歩いてゆくと、一歩ずつ空気が涼しくなっていくような気がした。やはり「町歩き」から、この歌はできたのだ。今から数年前、戊辰戦争（明治維新）一五〇周年を記念したとある企画で会津若松市を訪れた時のことである。

ご存じの通り会津若松市は戊辰戦争の激戦地で、新島八重を描いたNHKの大河ドラマ「八重の桜」の舞台ともなった。会津若松は海から遠い盆地であり、冬には雪が多い。この気候風土が「会津塗」と呼ばれる美しい伝統工芸を産んだわけだが、明治という時代と共に港から多くの人や物が行き交い発展してきた横浜とは、何から何まで対照的な町であると思う。戊辰戦争で破れた後、会津藩士たちはこの町を去って行った。その「戦後」は壮絶だった。私が高校生の頃までは「会津のおじいさん、おばあさんが〈あの戦争〉と言ったら、それは第二次世界大戦ではなく戊辰戦争のことだよ」と半ば真剣に言われていたし、大学を卒業して小学校の教員をしていたときには、ある同僚の結婚相手が山口県出身だということで「お前、長州の人間と結婚して本当に大丈夫なのか」と校長から心配され

た、という話も聴いた。同僚は会津若松の隣、会津高田の出身であった。かく言う私の母方の実家も会津にほど近い集落にあつて、すぐ裏手は戊辰戦争当時あの白虎隊が詰めていたという本陣跡である。今はその家も建て替えられてしまったが、母が子どもの頃には「西軍の兵隊が家に踏み込んできて蹴りこわした」という戸板がそのまま残っていたという。どれも冗談や笑い話ではないのだ。それほど凄惨で理不尽な戦争であり、「戦後」だったのだ。だからこそ人々は、「会津塗」という伝統工芸を守り、様々な技術や美意識を受け継ぎ、育ててきたのかもしれない。

そんなことを考えながら伝承館の中に展示されている見事な漆器の数々を見つめていると、彩りはどれも鮮やかで、しかしどこか憂いを帯びているようにも思われた。隣接する店舗には昔ながらの椀や文箱だけではなく、現代の生活様式に合わせた様々な製品が並んでいる。デザインも色も非常にスタイリッシュだが、やはり漆器ならではのにおいがする。そして、陶器やプラスチック製の器とはまったく違う光沢と軽さ、しつとりとした手触りがある。私は自分の両手にちょうどよい大きさのフリーカップをひとつ求めた。その朱色はシンプルだが強く、真夏の熱い太陽そのものようだった。フリーカップはこうして原稿を書いている今も、鮮やかな朱色のままに私の傍らにある。

今年の九月半ば、久しぶりにふたたび「髹の辻」まで歩いた。伝承館の前には咲きはじめた秋桜がゆつくりと揺れていた。漆器のにおいと巧みな造形をしばらく楽しんだ後は、観光客で賑わう七日町通りまで歩く。この「町歩き」もやはりメモは取らない。写真も撮らない。音楽も止めた。ただただ、歩く。会津の町にあの日のような暑さはもうなく、既に傾きかけた太陽が、黄金色に輝いていた。

坂という〈体感〉

鯨井可菜子

今日、とある新聞を入手する必要がある、最寄りのファミリーマートに出かけた。バス停とは反対方向に向かい、団地の真ん中を貫く坂を上る。ところが店ののぞいてみると、目当ての新聞だけ置かれていない。仕方がないので夫に頼まれたものだけとりあえず入手して、別のコンビニに行くことにした。——ここを皮切りに私は、一・五キロほどの道のりを歩き、新聞を求めてコンビニを五軒はしごしてしまったのである。夫に頼まれた無糖カフェラテと、ワンカップ大関へ上撰の入ったレジ袋をぶら下げたまま……。

それでも、久しぶりに近所を歩くのは新鮮だった。ごく近所であつても、日吉駅に出るときは通らない道なので発見がある。郵便局前の古い喫茶店は常連客で賑わっており、小さなスーパーが潰れた跡には居抜きで屋号の違う店が入っていた。そして、最初のファミリーマートで不首尾に終わり、次の行き先を探そうとグーグルマップを見ていたとき、店の向かいに坂道の表示を見つけた。「千代田坂」。こんな郊外に名前のついた坂があるなんて、なんだか東京みたいだ。このファミリーマートは尾根の上であり、上ってきたのは反対側、つまり綱島方面に下っていくのがこの「千代田坂」だった。興味を覚えるのぞきに行ってみると、その急峻さと長さにおののく。坂のはるか向こうには、新横浜プリンスホテルの円柱が雲の中に頭をつっこむようにして立っているのだった。

「千代田坂」を見つけて「東京みたいだ」と思った

のは、東京大学近辺のとある坂に馴染みがあるからだ。この地形は、東郷雄二さんの原稿にも登場する。

東大が建てられたのは本郷台地の上、本郷通りは尾根筋のいちばん高い所を通っている。だから右へ曲がっても左に曲がっても下り坂になる。右へ、つまり東に向かう坂道の一つが「新坂」だ。

根津神社の脇を通り、根津へと至る急坂で、森鷗外『青年』には「権現坂」として登場し、作中での描写から「S坂」という名前ももつ。私は仕事で根津神社の隣にある日本医科大学を訪ねることがあり、この坂を歩くときは、いつもスーツにヒール靴だ。だから上りよりも下りがつらい。到着後のアポイントメントへのプレッシャーも少し関係しているのだろうか。坂というものは、身体への負荷を通して、平地とは異なる影響を私たちに及ぼそうとする。その〈体感〉が、短歌にも現れてくるのかもしれない。

長崎の坂をよろこぶわが脚よあるいたところがふるさとになる
山下翔『温泉』

山下翔は長崎の出身である。東郷さんも書いている通り、長崎はよく知られた坂の町だ。坂を上る「わが脚」が、「あるいたところ」への愛着を一步一歩踏みしめる。「ふるさと」を〈体感〉によって捉え直し、確かなものにしたという願いがある。

私は横浜に来る前は地元福岡にいて、鉄道車内誌の編集をしていた。九州各地の町を訪ねる機会に恵まれたが、一番好きな町を問われたら、迷わず長崎を挙げる。なかでもたまらなく好きだと思ふのは、展望台の上で正午を迎えること。丘の上に点在する教会やキリスト教系の学校が、いつせいに鐘を鳴らすのだ。その鐘の音が、坂の間で反響しておおきく広がり、風について港のほうへ抜けていく。まさに坂の町でしか味わうことができない〈体感〉だと思ふ。

どこからか金管の鳴るひるさがり海星学園シャミン
ナード寮

笛川諒「短歌研究」二〇二二年五月号
海星学園もこの近辺にあるキリスト教系の学校の一つだ。この「金管」の音も、そんな反響をともなつて聞こえたのかもしれない。

長崎に足跡を残した斎藤茂吉も、この町で聞いた音を歌にしている。

朝あけて船より鳴れる太笛のこだまはながし竝み
よるふ山
斎藤茂吉『あらたま』

東京から長崎に着任した茂吉が、山々に反響する汽笛を詠んだ一首。「竝みよるふ山」によって「こだま」が長く響くのだ。『あらたま』の最後に置かれたこの歌について、茂吉は次のように自解している。

朝はやくから、港に泊てゐる汽船の鳴らす汽笛のおとは太くて長い特有なものである。それさへ旅人として珍らしいのに、その汽笛は港を圍む山々に反響する、のみならず、浦上の奥の方の丘陵小山まで傳はつて、實に長い音になつて聞こえる。

斎藤茂吉『作歌四十年』
茂吉の歌と記述は、私自身が感動を覚えた鐘の音の印象に符合する。驚きつつもなんだか嬉しい。

笛川と茂吉の歌は厳密には「町歩き」の歌ではない。でも、坂の町・長崎で得た〈体感〉を、読者に確かに手渡してくれる。こうした歌との出会いによって、私たちはあらゆるところへ出かけることができる。

近所で見つけた「千代田坂」も、いつか自分で歩いてみようと思う。あの急勾配を「あるいたところ」にすることで、思わぬ一首を得られるのかもしれない。

発見について

阿波野巧也

町歩き、あるいは散歩というものがそれなりに好きだと気づいたのは高校を卒業して、京都市内に下宿をはじめたからだだった。おそらく家と駅、駅と学校の往復だった単純で規則的な生活から、不規則で自由なひとり暮らしに移行したからだろうと思う。京都での暮らしは自由で、退屈で、でもいつも何かに焦っていた。そんな焦りを宥めながら、僕は琵琶湖疏水や鴨川などの水べりをひとり歩いてきたのだと思う。

ところで散歩と町歩きの違いとはなんだろう。東郷さんの文章では〈散歩の目的は気分転換か体力維持〉であるのに対して、〈町歩きの目的は知らないものに出会う発見にある〉のではないかと述べられている。散歩と町歩きを特別区分して考えたことはなかったけれど、強いて自分の体感に則って言えば、僕にとつて散歩とは散歩そのものを目的化した行為であるのに対して、町歩きは街中の別の目的を伴った移動、たとえば本屋へ買い物にいくとか、電車を浮かせるために一駅分歩くとか、そういった移動の中で町の解像度をあげていく行為である、という具合に認識している。したがって、町歩きをしようと思って町歩きにおもむくことはあまりなくて、生活の中で歩いている最中に突然何かを発見したり、別の道を行ってみたくなくなった。生活的歩行の中で不規則に町歩きらしさを感じさせるタイミングがやってくるという感覚だ。僕の場合は何かを見つけるために歩くのではなくて、歩いていたら何かを見つけると感じるという感覚だ。その瞬間に町

は町らしさを発見し始める。ほんとうは町はずっと正しく町であるはずなのだが、生きていて忙殺されていると「町を歩いている」ということを忘れてしまう。何かを見つけて、ただの歩行が町歩きに変質する瞬間とはすなわち、忙殺から心を解放して、自分が人間らしさを回復した瞬間であるとも言える。

とはいえ、町歩きで何かを見つけていることを目的として歩くのを楽しむことももちろんある。それは、どちらかというときま住んでいる町ではない町、たとえば大阪市内に出たときに歩くようなときだ。正確には、行きたい場所がいくつかあるときに、その場所と場所の間の移動を町歩きとして意識して楽しむのだ。梅田駅で降りてから中崎町まで歩き、その足で天満の飲み屋街へと向かうといった具合に。とはいえ、最初から何かを見つけよう意識するとこれがなかなかうまくいかない。町の空気を感じたり、短歌になるような特徴的な情景を探してみたりするのを目的とはしているのだけれど、そうしようと思ついても風景全体をぼんやり見つめたり、誰かのことを思い出したりしながら歩いてしまう。これはきつと僕の特性なのだろうと思う。自作の引用で恐縮だが、歌の素材探しの目的を持って町歩きしているときにできる歌は次の感じになる。

友達の友達も友達になるくもりびの天満・天六・
うれしい光
気持ちよきみを追いかける広い公園によさこい
サークルがたのしそう

どちらも歌集未収録の作品。「町歩きの短歌」と言った時に想起されるような、町の中にあつた特徴的な事象の写実というよりは、町の雰囲気と自分の感情を素

描したようなタッチで書いている。曲がりなりにもアララギの系譜の末端にいると自分では思っているのだけれどこれらの歌にはあまり写実らしさは感じられない。けれども、これはこれで町を歩いているときの自分の体感をしっかりと捉えているようにも思う。歌の素材に出会うという近視眼的な目的を拡張させて、町の中にいる自分自身の存在や感覚そのものに出会う、というのが町歩きの醍醐味なのかもしれない。そういう意味では、僕の「目的を持った町歩き」はけっこう成功している。

すこし話が逸れるけれど、僕はお酒を飲むことをひとつの趣味としている。お酒を飲んだ後に町の中を歩くのは、町と自分の身体がつながっているような、不思議な体の感覚になる。お酒の味や酒場の雰囲気も好きだけれど、飲んだ後の帰り道にいつもと違う道をゆつくり歩いていくのはとても楽しい。アルコールで緩んで拡張された身体感覚が、町を吹く風や物音、夜の温度感などを捉えているのを感じるだけで、僕は生きていくのが嬉しくなるのだ。こういったことを楽しみながら歩いていることも、先の二首のように具象による陰影よりもその場の体感のスケッチを優先したような歌をつくることに少なからず関係しているのではないかと思う。

ここまで書いてみて、町を歩いて短歌を書くことは、僕の思い込みでは「ものを発見して短歌をつくること」だと感じていたけれど、自分にとってはもっと緩く、町の中にいながら何かを考えたり感じたりする中で歌をつくることなのだ改めて認識した。「発見」に捉われすぎると逆に町の景色は固定化されてしまうのかも知れない。町歩きの世界はまだ奥深い。

街の経験

嵯峨直樹

私には街をぶらぶらして新たな発見をしようという習慣がない。たぶん、東北沿岸の小さな街で育ったからだと思う。

街という駅から一すじだけ賑わっている久慈銀座だけであった。そこには二階建ての「デパート」もあったし、美味しいお菓子屋さんもあった。

二階建てのになぜ「デパート」かというところのお店がそう名乗っていたからで、事実、二階に行くだけのエスカレーターがあった（降りるのは階段だった）。イトコと何度もそのエスカレーターに乗って、階段で降りてを繰り返して、ゲラゲラ笑っていたのを覚えている。

新しいお店もめったにできないし、できたら新聞のチラシですぐ知ることができる。ぶらぶら歩いて見つける余地などないのだ。

つまり、私は街を歩いてはいるが、街を散策するという習慣はない。首都圏に来てそろそろ三十年だが、街を目的なしにぶらぶら歩くという習慣は結局のところ身につけていない。たまに旅行先でぶらぶら歩いたりするだけだ。

小さな街しかない地方に住んでいる方なら分かるかも知れないが、街は目的をもってわざわざ「出る」もので、そこには少し気合いが必要なのだ。だから、地方都市を歩く人々はおおむね首都圏のそれよりおしゃべりな場合が多い。狭い街だから知り合いとばったり会うことも考えられるからいつも少し身ぎれいにし

ている。

それに対して、都市部の人はわりと普段着で街に出かける。街なかで日常だからであろう、それ程の気合いも感じられない。

そういえば、横浜出身の、いつてみれば私よりは都会育ちの妻と付き合い始めの頃、面白い体験をした。

夜。近場のコンビニに何か甘いものを買に行くという話になった。その頃流行っていた「まるごとバナナ」だったと思う。

自分はいつも通りコートを着て、それなりの格好をして出かけようと準備をしたが（何しろ街に「出る」のだから）、妻は違った。

部屋にあった赤いはんてんを羽織ってそのまま出ようとしたのである。私は強固に反対したが、妻は誰も見ていない、そもそもあなたは自意識過剰であると突っぱねたのである。はげしい喧嘩になったが、私が悪かったのだろうか。

私は恥ずかしい思いをしながら赤いはんてんの妻とコンビニに行ったが、正直これはすごい事だと感心した。人の目にびくびくしていない妻は強いと思つたし、都会の人間はそういうものかと納得した。

とはいえ、それで降長く都市部に住んでいるが、はんでん姿でコンビニにいる若い女性を見たことがない。ともかく、喧嘩にはなったがあの経験で私は妻をとでも見直したのである。

自身が地方の出身である事とは別に、街を安らかな場所、安心して心を任せられない場所という思いがどこかにある。これも、街歩きをする気を失せさせる原因だと思う。

深い不安感があつて、それはおそらく父と無関係ではない。

父は若い頃から警察にマークされていると信じ込ん

でいて今でもたぶんそうだ。言うとな族に狂人扱される（事実そうではないか）から言わないだけだろう。

家族でドライブに行くとする。

警察車両とすれ違つて態度が豹変、ドライブは地獄である。警察と戦うモードに豹変する。マークされている証拠として警察の写真を撮ろうとする。カメラは彼の唯一の武器であつて、フィルムには沢山の警察官の姿が映っている。

街を家族で歩くときも彼は一人で先を歩き、母と私は彼から距離をおいて歩く。

これは彼なりの優しさであつて、警察に狙われている自分への脅威を私たち家族へ波及させない為の心意気なのである。彼は家族を心底、愛している。そんな風に家族で歩いているとき、前方にパトカーが通るのを見かけたときの私と母の絶望感といつたら半端ない。父の豹変をまた見せられるのではないか？ ほうら、もういつもの父ではない。今日の家族のお出かけはこれで終了である。

警察の皆さんには心より申し訳ないと思う。

私の父のような者は少なくないようなので、これも福祉の仕事の一つとどうか思つていただきたい。彼は稼ぎが悪くなかつたので税金なら沢山払つていたはずだ。

そんな地獄のような世界に住んでいたはずの父は街歩きが大好きで、今もほぼ毎日、イオンモールに出かけている。要するに、周囲が思うほどには彼が住んでいる世界は地獄ではないのである。

他方で、私はこの父のせいもあつてか街というものをあまり好きではない。また、最初に述べた出身の理由もあるのだろうが、街歩きというのがあまりピンと来ないのである。

心ひとすぢ

森 藍火

私はここに住んで五十二年になる。私が嫁に来た時ここは工場の町だった。大きなバス通りに面した商家であった。酒・たばこ・一般食品を扱い、不動産業も営み、多忙な日々であった。

いまは工場が姿を消し、周囲はマンションが立ち並び、近隣に大型スーパーが二軒、コンビニも多数。すっかり様相を変えてしまった。

昔から自然になじみは少ないが、私が気に入ったのは大通りに沿った街路樹である。プラタナスが並び、所々に枇杷の木がある。これが私の身近な自然だ。

北の星指して傾く街路樹のひとつぢわれに戻りゆく道
いつか無に還るわたしの歩みぬる夏ゆたかなる街

路樹の道

海からも川からも五百メートルの、昔は浜だった所で、家の周囲どこを掘ってもすぐに貝殻がでてくる。由緒ある潮田神社の夏祭りは賑やかで、バスのルートも二日間変更されて地域を挙げての快活さだ。

みつしりと繁る葉隠れ枇杷の実を灯してそこまで夏祭りくる

梅雨晴れの町を神輿が練りてゆく川ひとすぢに光るこの町
電柱に「海拔一・五メートル」コンビニナートの火に近き町

私が来た当時は、家のすぐ裏には運河があり、釣舟屋が舟を並べていた。いまは埋め立てられ、かなり長い遊歩道になっている。一度その道に入ると途中で出られないので足を踏み入れるには勇気が要る。

ひとすぢの光のやうな遊歩道かつては運河にありしこの道

行ききるか引き返すかの二択なる運河跡地のひとつぢの道

汐入町、入舟公園、海芝浦、春の鶴見に潮の香みつる

走水、浦賀水道こえて来し潮か春のつまさき濡らす

あと何年私は生きるか知らないが、変貌し続けるこの町が好きで、街路樹を仰ぎ自分の年輪を重ねる。

空が広い町

三枝むつみ

横浜市の西部にあたる旭区、そのなかほどの二俣川に住んで二十年が経つ。故郷を離れ学生時代を含めると住まいを六度変えてきた私。この地は人生で最も長く暮らす地となった。ただ子供たちの成人後の転居であり、幼稚園の送り迎え、子供の夏祭りやバザーの準備で駆けずり回った黄金の時代の痕跡はないのだ。

街角でママ友や子供の友人と出会う楽しみもない。横浜ズーラシアは大いに誇れるが、血縁、地縁のないこの地に住み続けるのはなぜだろうか。大山参りの古道が残り、丹沢山系と富士山を日々望むことが出来る、つまり自然を身近に感じて生きられるからなのか。

旭区は市内のなかで標高が高い。その中であって更

に坂を上った高台に我が家は建つ。日の出、日の入りの時間帯に窓から眺める空は雲をたなびかせて美しい。亡くなった両親と兄に思いが向く時である。空が広いことが一番の魅力なのだこのごろ思う。

三年前に相鉄線がJR直通線を開業し、二俣川駅から新宿駅まで乗り換えなしで行けるようになった。都心への外出にも余裕が出てきた。来年は新横浜へも直通となる。駅ビルにはユニクロ、無印の店が入り、簡素な私の買い物に不自由はない。

この先、転居はあるのかと自身にも問う。おそらくこの地が終の棲家なのだろう。

新婚の海辺の町より二度越しぬ夏の大三角を結びとく

ジグザグと路線乗り換え揺られきぬ夢中にきける「ふたまたがはー」

永住はあるかと問はれ二十年うす紅ねむの花の咲きたす

横浜のチベットそれは本場で標高100m眺めよろしく

富士見区も候補名なりし旭区に住まへば日がな一日富士在り

尾根道を重忠馬に馳せし日の富士は煙を上げてをりしか
旭区役所近く畠山重忠の首塚がある

富士の嶺のけしむらさきの裾のさき拓かれゆかむ友住む駿河へ

ぬばたまの夢の新宿直通線相鉄車輛はネイビーブルー

相鉄線に行きて帰れるわが翼風切り羽根をしゆつとたたみて

ランドマークタワーはるかに灯りそむ振り向けば嗚呼富士の暮れゆく

自然と歴史のふる里、三保町 荻谷君代

緑区三保町は「谷戸」の多い土地である。

今、人口が急速に増えているこの町は、古来より、人々にとって住みやすいところであったのだろう。

縄文時代の住居跡や、全長28メートルもある、前方後円墳などが発掘され、遺跡台帳に記録されている。

縄文のムラはふたたび埋められて宅地造成一気に進む

私たちは縄文の人々のムラの跡に暮らし、彼らと同じ空を見、風の音を聴いているのだ。

町中の道を歩けば、庚申塔、道祖神、馬頭観世音、お滝さま、弁天さま、六地藏…と、歳月の中に人々が暮らした豊かな彩りに出会うことができる。土地開発のために、現在は町内の寺に移されているものもある。

その寺、旧城寺は、かつて榎下城があった跡に建立された。室町時代、鎌倉公方足利持氏は、京都の足利将軍に叛逆し、討伐された。永享の乱である。持氏の家臣であった、城主、上杉憲直も、現在の金沢文庫、称名寺にて自刃した。

耳を澄ませば、何かが聞こえはしないだろうか。

この同じ空間に時を隔て立つ誰かはわたしを知らずわたしも

かたちある者とも何ともわからねど擦れ違ふとき
ふはり花の香

いま私が立つ、この同じ場所に、かつて確かに誰か

がいた。それは太古の人々であり、鎌倉へと馬で向かう武士たちであり、懸命に田畑を耕す人々であった。彼らが私のことを知らないように、私も彼らを知らない。けれどもその気配は、花の香のように、私には確かに感じられるのである。

見渡せば現代の家々が建ち並び、明るい陽光の中を人々が歩いている。今はコロナ禍で中止の盆踊りや、秋祭りなど、町をあげての年中行事も、いつかまた、再開できる日のくることを願う。人々の憩いの場である「三保市民の森」の桜は今年も見事な花を咲かせた。

花と消せ花と生まれていくたびもわれに逢ひくる
この世の桜

豊かな自然と歴史にはぐくまれたこの緑区三保町が、私は好きである。(短歌は歌集『白杖と花びら』より)

唐楓並木の町

平賀富美子

私が住む町の最寄駅は横浜線鴨居駅。改札口を出てコンコースを進むと、正面に額縁のような大きな窓があり、中山方面に向かって真っ直ぐに延びる線路の上には、大山・富士山・丹沢の山々が正面に見える。夕陽にシルエットの富士、朝日に輝く雪の富士など、時々スマホのカメラをかざす人を見かける。すぐ近くの鶴見川にかかる鴨池大橋から見える富士山は「関東富士見百景」としても知られている。

平成十二年緑区制三十周年を記念して鶴見川の堤防に、二百メートルにわたって桜が植えられた。今ではその桜がかなりの大樹となって季節を彩っている。ワシントンのポトマック河畔に植えられた桜が日本に里

帰りをして、シドモア桜と名付けられた桜もあり、春は桜を愉しむ人たちが絶える事がない。鳥も鴨居の地名の由来になった鴨をはじめ鶯・鶉・白鷺・青鷺・翡翠・燕等々枚挙に暇がない。川原はどんど焼きなどの行事も行われ、地域の人たちが多く集う場所でもある。

聞こえる初音は川原の灌木のあのあたりから鶴見川 春

色 鶴見川の支流の上を一直線碧き閃光はかはせみの

駅の南側に戻って中山方面に十五分ほど歩いた辺りがわが家になる。緩やかな斜面が開発されて、かなり大きな住宅地になった。その住宅地を貫くように幹線道路があつて、両側は唐楓の並木になっている。春の芽吹き若々しい緑から、夏の濃い緑、そして秋の黄葉は見とれてしまう。黄葉も徐々に変化していく様はなんとも美しい。そして「横浜なのに」とよくいわれるのが点在する畑。わが家の直ぐ近くにも畑があり、住み始めて以来、ずっとこの畑の野菜をいただいている。子供たちが幼稚園や小学生の頃は、苺を取りに毎朝畑に通ったものだ。今でも朝九時には畑の横の小屋に今朝収穫された野菜が並び、新鮮な野菜を味わいながら、季節感をも味わう事ができる。

十本で一束百円たつぷりの緑のバジル畑に買へり
思はざる長さのあれば大根を胸にかかへる葉を折らぬやう

少し行けばらばーとや新横浜があり、都会の便利さもあがりながら、日常はまだまだ豊かな自然が残り、こころ静かに暮らせる町である。

鶴巻は坂の町

武田素晴

ここ鶴巻は秦野市の東端に位置し、県道613号が小田急線鶴巻温泉駅の横で交わるあたりが深い谷になり、北東に向かって峠を越えると善波川を境に伊勢原市、南に向かって峠を越えると大根川を境に平塚市となる。旧地名を落幡村といつて昔は落ち込んだ湿地であったと聞いたことがある。低地やなだらかな丘陵、そしてやや急坂の峠道など、少し複雑な地形の中、一年を通して野鳥の声が絶えず、夏の蟬や蛙の声も近く、長閑な田舎の趣がある。

駅前には数件の温泉旅館が点在する。温泉旅館の一つ「陣屋」は鎌倉武将の一人、和田義盛の別邸跡に立ち広大な庭を持つている。鶴巻は知る人ぞ知る温泉街、アルカリ性の泉質で近くは弘法山など丹沢のハイキングを楽しんだ後、ここで汗を流して帰る人は多い。

秦野は塔ノ岳、丹沢山、蛭ヶ岳などいくつもの登山、ハイキングコースを有している。ハイキングコースの一つとして、秦野駅から権現山、弘法山を経て、善波峠を歩けば吾妻山に至る。そのすぐ下が鶴巻である。このコースは春には様々な花が咲き、多くの好きな木

五倍子や連翹が至る所に見られるのである。

我が家は鶴巻温泉の駅に近いが、野鳥の声が絶えず聞こえる。家の周囲は住宅が多くあるが、小さな田や畑も多く残っていて、昔の里山の雰囲気を残している。野鳥の声を判別できないのが残念であるが、近くの梢で鳴く鳥たちを楽しんでいる。坂の多い鶴巻はゆっくり歩くのがふさわしい町だ。

春山は命に満ちて一斉に黄に咲き出する土佐水木

山茱萸

背丈より高きところに風受けてわずかに揺れる青

空木五倍子

断崖の草叢の中固まって際立ち咲ける山吹の花

金目川に沿うて歩き一日の足の痛みを足湯に癒やす

吾妻山汗拭く木陰四阿のかなたに走水の幻想

隣町に続く峠の明神社幼児集いて声放たれる

換気する町の図書館木の棚と木の床流れ青葉の香り

四方から坂を上れば真ん中にお地藏様が微笑んでいる

町の影

清水あかね

私の住む「桜台」は、横浜のどこにでもあるようなありふれた住宅地だ。上大岡駅からバスで十五分、高い丘の上にある。昭和三十年代の終りに山を切り崩し作られたこの町に、父は祖父母と共に東京から移り住んだ。母はそこに嫁入りし、私もこの町で生まれ育った。

小さな頃はまだまだのどかで、大きなキャベツ畑が広がっていた。桜台のバス通りにはかつて桜並木があり、春には見事な花を咲かせていた。町の名はこれに由来したのだろう。しかし、その桜は老木になり倒れそうとか、電線に引っかかるという理由で一本ずつ切り倒されていった。今や桜の木が一本もない桜台になってしまった。キャベツ畑も住宅や駐車場、公園に変わった。バス通りにはマンションが増え、町の様子もずいぶん様変わりした。

駅には隣町の「大久保」を通らないと行かれない。

私は中学生の時から同じルートで通学・通勤しており、大久保もわが町の一部のように感じている。大久保もなんの変哲もない住宅街だが、なぜか小さなバーやスナックが点在する。駅から入り込んだ場所にしてはちよつと不思議だと前から思っていた。しかし、実はこの大久保には秘められた過去があった。最近それを知りひどく驚いている。

大久保町大久保池跡通過して久保坂のぼる宵闇のバス

ドラックストア、マンション、コインパーキングどこにでもある町並み続く

インターネットで町の歴史を紐解けばぞろぞろ出てくる料亭、待合

「君の星」「一梅」「竹の家」古地図には少し気取った屋号が並ぶ

大久保はハマの箱根と呼ばれいきくねくね坂に名残の残る

昔遊女が身投げしたと言伝え大久保池よ今ほもうない

今宵黄に滴る満月 百年前ふるさとと思ひ遊女も見しか

人が人を売り買っていた通りにも黒猫眠らす陽だまりのある

知らなかった顔にたじろぐ半世紀親しみし町の臙脂色の痣

曇り日の朝のひかりは優しく町どこにも影をつくらず

大正末から花街として発展した大久保は昭和十年頃最盛期を迎え、昭和三十年代初めにその灯を消した。

鶴見川風物

松崎英司

横浜で三十五年以上ホテルの和食の店で働いていたので、臨海地区が暮らす街角だった。定年退職してからは出張料理という形態の仕事をしている。時間に余裕があり、趣味のマラソンを楽しむ時間も増えた。私は港北区在住だが、近くの鶴見川河川敷を走っている。

鷹野大橋から下流へ進み、末吉橋、新鶴見橋、河口の鶴見大橋まで行くこともある。又、上流を進めば大綱橋、新羽橋、ワールドカップ大橋、新横浜大橋、鴨池大橋などかなりの橋がかけてられている。それだけ人の流れが多いという事だろう。

季節と時間により景色は常に変化しているので、走っていて飽きる事は無い。

猛き葉に枇杷の青き実覆はれて高みの闇に蒼黒く
見ゆ

枇杷の木は冬に香の良い花が咲き、蒼い実がなり、熟していく。夏の強烈な日差しを受けている葉は猛々しい感じだ。

燕麦の空莢揺るる川原に亡き父過るゆふぐれのな
か

カラスムギは熟すと莢が白くなり割れ実を落とす。鳥にとつては御馳走となる。しかし枯れた莢が一斉に風に揺れると、どこか異界にいるように感じる事がある。

身籠りし猫が川原を歩きぬる夕暮れ時はゆるりと

流る

猫のお腹が大きくなるのは厳しい寒さが収まる頃だ。この時期は日が幾分長くなり、気も陽に転じていくと感じる。

ただひとりつばめつばくろつばくらめ指折り数へ
初夏の歌

鷹大橋の橋脚には多数のイワツバメの巣がある。五月の連休前後に渡ってきて川原を激しく飛び回り、餌を求める声もかなり響いてくる。初燕を発見した時は、何故か嬉しくなる。

休日の角度に合はせクレイン車はインターチェン
ジのかたへに並ぶ

第三京浜港北インターの景色。首都高を繋げたり、日本一のネットスーパの建築など、工事は長期間続いている。

色褪せしカラーコーンを突き破り雑草^{あらぐさ}伸ぶる夏の
日盛り

私の暮らす町

渋谷香代子

横浜に住んでいると言うとたいがいの人々はみなとみらいの風景を思い浮べるようだ。窓を開けると観覧車やホテルの向うに外国船の行き交う青い海が見える、そんな暮らし。でも、私の住む緑区は海は見えない。ただ鶴見川が静かに流れ、その川に架かる橋の上から

遠く富士山が望まれる。

鶴見川に沿うように走る横浜線の鴨居駅、何年か前にららぽーと横浜が設立され、かなりグレードアップしたけれど、もしかしたら傾いたマンションで有名かも知れない。

昨年の10月に失業したのを機に、介護ヘルパーの資格をとり地元の施設に登録して、援助の必要な方のお宅を訪問している。

自転車走ってみると、改めて坂道だらけの町だと実感する。その土地に住みながらも、歩く道は限られていて、こうして訪問を仕事にしなければ、ほとんどの道を知らずに過ごしていたのだろう。

介護ヘルパー一年生、試行錯誤の連続だけれど、私の訪問を楽しみに待っていてくださる人がいることに喜びを感じる。

外出もままならない暮らしの中で、外の光や風を部屋に招き入れるような、そんな役割を果たせたらと願いながら働いている。

ひとりひとりの生きて来た人生がお宅に伺っている
とひしひしと伝わってくる。

なんとなく母に似ている丸い背をいくどもさする
介護ヘルパー

孫の名も忘れてしまったヨシエさん夫のうらざり
生き生き語る

浴室やトイレの掃除に訪問すその人の生を 見つ
めながら

あと何年でしょうか。この町で个性的で魅力的な人生の先輩たちのお手伝いをさせていただきましよう。教わることはかなりの毎日、坂の多いこの町。自転車を走らせて。

編集後記

今の時代は、言葉の世界が人にゆたかさをもたらす役割を担っているのではないかと思います。

一年の活動が停止という困惑するなかで作り上げた「うたの地図 Yokohama」をもとに、昨年はデザインと言葉からのアプローチで装訂家・俳人の間村俊一さんのお仕事をらせていただき、言葉がデザインされる過程を知ることができました。

今年も、静の地図を動かしたく、特集1「東郷雄二さんと歩く町空間——人ともが出会う町」、特集2「暮らす町角」という企画を提案い

たしました。

特集1では、言語学者の東郷雄二さんにエッセイを書いていただき、それをゲスト（松村正直さん、齋藤芳生さん、阿波野巧也さん）を含めた第二執筆者が読み、文章を書くという二段階の方法を取りました。東郷さんの言葉に出会うことで、執筆者それぞれの町空間が立ち現れていきます。

特集2では、お住まいの町を短歌と文章で綴っていたことで、横浜市を中心とした町並みをそこに暮らす方々だからこそ知る風景を鮮や

かに見ることが出来ます。

暑い時期にかけてご執筆いただき、太陽のエネルギーを筆力にかえて言葉を生み出してくださいました。生き生きとしたゆたかな町の空間、町並みに寄り添うように、私たちは言葉の世界を楽しむことができます。自由が抑制される生活のなかで、心の眼のなかに見える思い出の景色とともに味わうことができます。

ご執筆いただいた方々に心から感謝申し上げます。これからも、横浜から大らかに言葉を発信してゆけるよう、会員の

方々とともに運営委員一同、力を合わせてゆきたいと思っております。

お知らせ

お悔やみのお知らせがごさいます。運営委員として会のためにご尽力いただいた大久保晴雄さんがお亡くなりになりました。これからの活動を楽しみにしておられたことをお聞きし、残念でなりません。ご冥福をお祈り申し上げます。

〔M・T〕

横浜歌人会会報第一二三号

発行日 二〇二二年十二月二十四日

編集人 高橋みずほ

発行人 桜井 健司

発行所 横浜歌人会

URL <http://yokohama-kk.art.coccan.jp/>

制作 アトリエ云

印刷 啓文社

このファイルはホームページ配布版のため、奥付の内容が印刷版のものとは異なります。